

チャレンジルームを中心とした校内支援体制の在り方について

常滑市立鬼崎南小学校

1 はじめに

本校は児童数680人、学級数22（内特別支援学級2）の中規模校である。特別支援学級は、昭和50年に開設された知的障害学級（現在のひまわり2組）と昭和60年に開設された自閉症・情緒障害学級（現在のひまわり1組）である。昭和62・63年度には愛知県教育委員会の委嘱により、「みとめあおう、ささえあおう、ともにのびよう」のテーマで特殊教育の研究実践に取り組み、生活単元学習を中心に子供たちの力を伸ばし、社会での自立を目指すとともに周囲の者の理解促進を図り、特殊教育の向上に努めた経緯がある。

その後も、特別学級を中心に、障害のある児童の指導にあたってきたが、通常の学級に在籍する発達障害等の児童の抱える困り感に寄り添うことがなかなかできず、その困り感を受け止めるまでの校内体制の整備も、十分にはできていなかった。教師も指導上の困り感を抱えながらも、その困り感を解決する糸口を見つけ出せないまま、日々奮闘していた。平成19年度の特設教育から特別支援教育への移行に伴い、校内委員会の設置、特別支援教育コーディネーターの指名と校内体制を徐々に整えてきたが、通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする児童への対応は難しく、依然として手探りの状態であった。

このような状況の中、平成20年度に愛知県教育委員会より、特別支援教育サポート校研究の委嘱を受けた。

2 研究の概要

(1) 研究のねらい

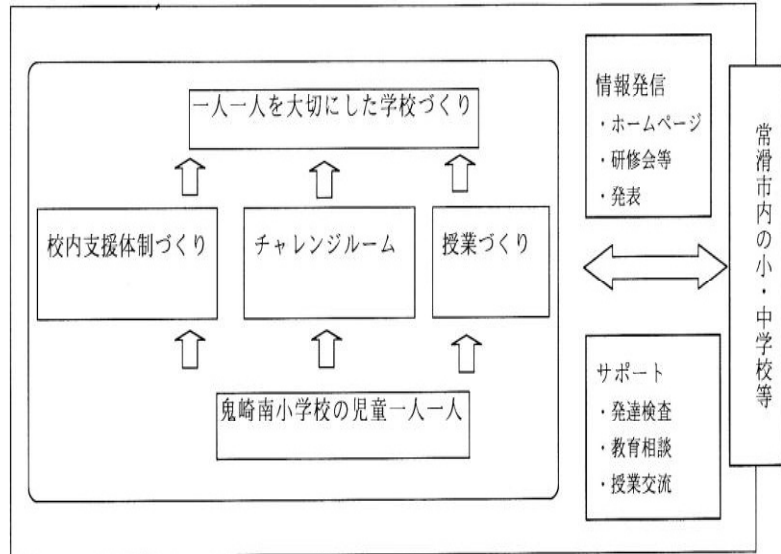
- ア 特別支援学級担任が、その専門性を生かして、通常の学級担任や特別支援教育コーディネーター等の関係教職員とかかわりながら、特別な支援を必要とする児童への指導をする校内支援体制の在り方について検討する。
- イ 通常の学級に在籍している発達障害等がある特別な支援を必要とする児童に、障害に応じた教科指導や障害に起因する学習上および生活上の困難の改善・克服のための支援を必要な時間だけ受けることのできるリソース・ルーム（本校ではチャレンジルームと呼んでいる）の在り方について検討する。
- ウ 通常の学級の授業を工夫し、チャレンジルームに通う児童及び特別な支援を必要とする児童にとって、安心感が得られ、分かりやすさを感じられるようなきめ細かい指導方法について研究する。
- エ サポート校として、近隣の小・中学校（幼稚園・保育園）の特別支援学級担任や通常の学級担任等への指導・助言、発達検査や教育相談等を行い、近隣の小・中学校が特別

支援教育を推進するための支援をする。

(2) 研究の構想

「校内支援体制づくり」「チャレンジルームの運営」「通常の学級での授業づくり」の三本柱とし、この三つが連動する「一人一人を大切にした学校づくり」を目指した。

また、近隣の小・中学校へのサポートとしては、本校の取組を発信したり、各種検査や教育相談等に協力したりしていくこととした。



研究の構想図

3 研究の実践

(1) 校内支援体制づくり

ア 校内支援の流れ

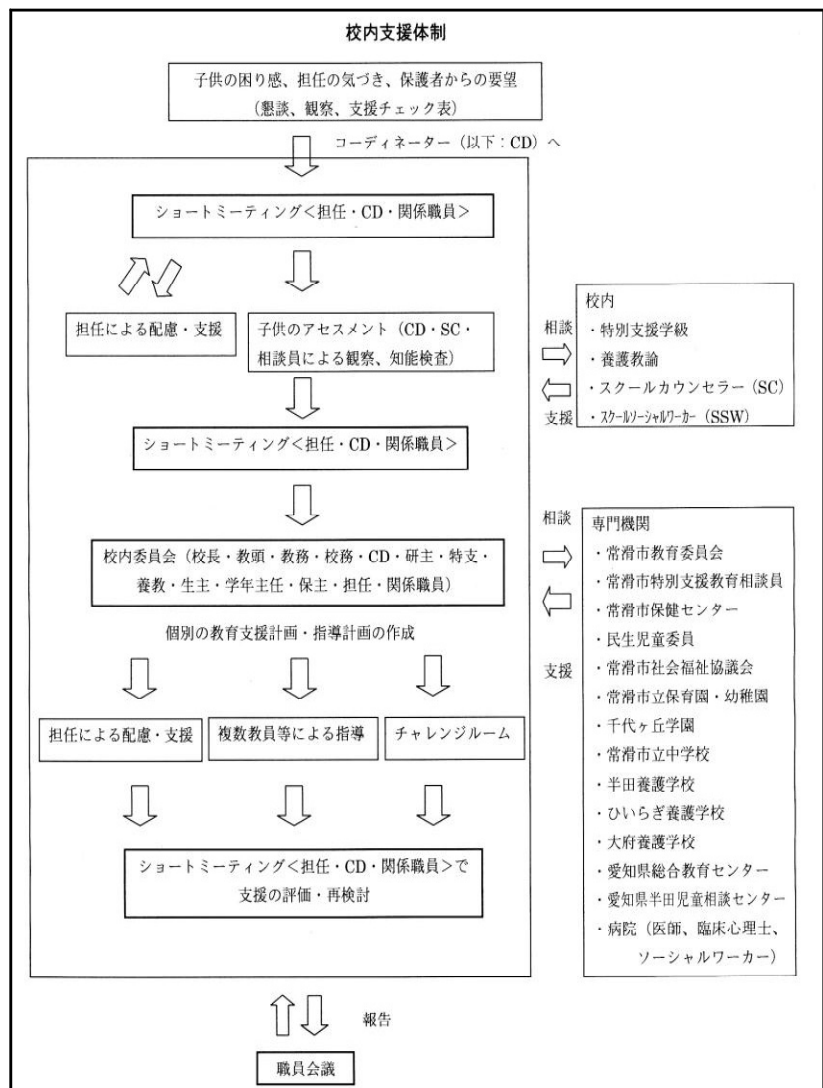
児童・担任・保護者の困り感を出発点にし、校内・校外でできる支援についての流れを整えた。どこに相談できるのか、どのような方法で支援ができるのかを示し、担任だけでなく、全校で当該児童を支援していく体制づくりを行った。

イ 支援チェック表

担任が、学級の児童一人一人と向き合い、児童の困り感に気づき、その支援をするために、学校独自のチェック表を作成し、児童の実態把握を行った。

ウ ショートミーティング

職員室の一角で気になる児童について気軽に話



せる会合として、ショートミーティングを実施した。ショートミーティングの前には、特別支援教育コーディネーターや関係職員がクラスの様子を見て、それをもとに、担任、特別支援教育コーディネーター、関係職員で、児童の困り感について話し合った。担任の気持ちにも寄り添い、解決策について話し合った。

	月	火	水	木	金	
1	ひまわり 体育		2の3 算数	5の2 算数	ひまわり 算数	2の1 算数
2	3の1 音楽交流	4の3 算数	1の3 体育交流	2の1 算数	1の3 体育交流	1の3 音楽交流
3	5の3 国語	4の2 算数	5の3 体育交流	2の2 国語	5の3 算数	5の3 音楽交流
4	1の3 体育交流	2の3 国語	5の2 理科	2の3 国語	3の1 音楽交流	4の2 国語
5		2の2 国語			6の4 体育交流	4の3 算数

生活支援員の配置時間割

エ 校内委員会

校内での支援の方法を決定する場として校内委員会を位置付けた。主に、チャレンジルームの入級・退級の決定の場とし、学期に1回程度開催した。また、チャレンジルームでの児童の様子やショートミーティングの報告も行った。

オ 生活支援員の活用

常滑市の採用で、2人の生活支援員が配置された。週4日と2日の勤務で火曜日のみ2人体制である。有効な支援になるように、支援チェック表やショートミーティングの結果を基に、特別支援教育コーディネーターが校内でニーズのあるところへ配置した。

また、生活支援員の支援記録簿を作成し、「個別の指導計画」とは別に、その児童への具体的な支援の記録を累積して、貴重な資料としている。

カ 通常の学級における「個別の指導計画」の作成

チャレンジルームに通う児童を含め、通常の学級で支援が必要な児童23人の「個別の指導計画」を作成した。

(2) チャレンジルームの運営

ア チャレンジルームの紹介

認知度を高め、誤解や先入観を取り除くため、全保護者に案内文を配付した。また、児童に対しても、学年に応じて分かりやすく説明した。その結果、チャレンジルームに通う児童は後ろめたさや恥ずかしさがなくなり、級友からも温かく見守ってもらえる関係になっていった。保護者も理解が深まり、利用を希望するようになった。



チャレンジルームの授業の様子

イ チャレンジルームの運営

週2時間程度、学年5人以内で取り出しを行っている。現在、特別支援学級担任3人と校務主任の計4人が指導に当たっている。指導時間については、担任が抜けたあとの特別支援学級の授業を教頭・教務主任・校務主任が受けもっていたが、特別支援学級とチャレンジルーム優先で時間割を編成し、交流を工夫することで、教頭、教務主任の負担を減らすことができた。現在、14人の児童が右の時間割で授

時限	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1限		5年1人 (特担A教諭)			3年1人 (特担C教諭)
2限			3年1人 (特担C教諭)	5年4人 (校務主任)	6年4人 (特担A教諭)
3限		5年4人 (校務主任)	6年4人 (特担A教諭)	4年4人 (特担B教諭)	4年1人 (特担B教諭)
4限		4年4人 (特担B教諭)			

チャレンジルームの時間割